ISSN 1881－0675

大阪市大『創造都市研究』第３巻第２号（通巻４号）　2007年12月
査読論文
33頁～52頁

せめぎ合う包摂と排除の諸相
－ある更生施設とコミュニティをめぐる事例に基づいて－

李惠子（大阪市立大学大学院・創造都市研究科・博士(後期)課程）

Competing Multi-status between Inclusion and Exclusion : Based on a Case of a Rehabilitation Facility and Its Community

LEE Haeja（Doctoral Course for Creative Cities, Graduate School for Creative Cities, Osaka City University）

【目次】

はじめに
Ⅰ．Ｚ施設とコミュニティ
Ⅱ．Ｚ施設の地域活動とその考察
Ⅲ．せめぎあう包摂と排除のかたち
おわりに

【要約】

本稿の目的は、関西地方にある更生施設（Ｚ施設）とコミュニティとの間にある複雑に入り組んだ包摂と排除の諸相を考察し、多様な経歴や生活様式を持つ人々が共生してゆくための手掛かりを提示することである。

筆者は、2005年５月から2006年３月までの間、Ｚ施設で行われている喫茶事業に、参与観察者として参加を許されてきた。喫茶事業スタッフの立場で現場に居続けることができたのである。その過程で、更生施設とそれを取り巻くコミュニティとの間に、ある種のコンフリクトが存在しているのではないか、という問題意識を持った。それは、Ｚ施設がコミュニティに対して行う日常的な活動によって、コミュニティの人々に、Ｚ施設の存在を認めさせていく以外にはない、せめぎ合いの連続なのだ、という施設長の発言を聞いてより明確なものとなった。

Ｚ施設は、コミュニティからは迷惑施設であると認識されてきた。筆者は、Ｚ施設がコミュニティ内で行う活動（具体的には、小学校児童の安全を守るための活動、高齢者への食事サービス等）や、コミュニティの人々が施設に対して行っているボランティア活動等を、観察し、聞き取りを行った。参与観察の期間は、2005年５月から翌2006年10月にまで及んだ。インフォーマントは、施設の入所者やＯＢ、職員はもとより、ボランティア、近隣住民、小学校関係者、国際的医療団所属の看護師等、多岐にわたっている。

その結果、Ｚ施設とコミュニティとの間にある、包摂と排除の、密接にからみ合っている様相を認識することができた。

本論文は、複数のレフェリーと編集委員会による査読を受けたものである。

人と人が共生するためには、互いの間にある溝を認識することが必要である。包摂と排除という社会関係は二項対立図式で捉えられるものではなく、その境界は明白ではない。それ故にこそ、あるセグメントにおける、包摂と排除のあり方を詳細に調査し、その入り組んだ諸相を考察することは、共生社会を構築する一助になるものと考える。

【キーワード】
社会的包摂、社会的排除、更生施設、コミュニティ、元ホームレス

【Abstract】

This study aimed to prospect a complicated and turbulent situation of inclusion and exclusion between a rehabilitation center for former homeless people（Z center）in Kansai area and community, therefore offers clues to persons to live together.

The author got permission to participate in an enterprise for coffee shop as a participant observer. That enabled to stay there as a staff.

In that process, the author realized a problem that there might be a conflict between rehabilitation center and surrounding community.

The idea was defined when a chief manager of the rehabilitation center said that Z center was always under conflicting status, has nothing else to do but daily work to community people and compelling acceptance of the Z center.

The Z center had been regarded as a troublesome to community. The author observed and came in for an interview the activities of the Z center in community, to be concrete, as in security work for elementary school children or diet service for the elderly.

The term of participant observation ranged from May 2005 to December 2006. The informants ranged from active or former inmates, and center's staffs as a matter of course, to volunteers, neighboring citizens, elementary school concerned, medical international team attending nurse.

In conclusion, the author could realize that inclusion and exclusion tied closely between Z center and community.

Above all, it is necessary to recognize each other's differences in order to live together. Social relationship between inclusion and exclusion should not be assumed as antagonists, those boundaries are unclear. Therefore, the author concludes that detailed investigation about inclusion and exclusion under the complicated and turbulent situation suggests a clue to convivial society.

【Keywords】
Social Inclusion, Social Exclusion, Rehabilitation Facility, Community, Former Homeless People

はじめに

本稿の目的は、関西地方にある更生施設（Z施設）[1]とコミュニティとの間にある複雑に入り組んだ包摂と排除の諸相を分析し記述することによって、包摂と排除という社会関係は二項対立図式で捉えられるものではなく、その境界は明白ではないことを明らかにすることにある。

ある者、集団を排除するために、他の者、集団を排除の同調者として包摂する行為を同時に行うことがある。あるセグメントに見られる、包摂と排除のあり方を詳細に調査し、その入り組んだ諸相を考察することは、共生社会を考える上で重要な作業である。なぜならば、様々な経歴や生活様式を持つ人々が共生するためには、まずなにより互いの間にある溝を認識することが必要不可欠であると考えるからである。

筆者は、2005年5月から翌年3月まで、Z施設内で毎週木曜日の午後行われている喫茶事業に、参与観察

者として参加を許されてきた。11カ月という期間を経て、Ｚ施設とそれを取り巻くコミュニティ[2]との間に、ある種のコンフリクト[3]が存在しているのではという考えが生じた。この考えは、Ｚ施設によるコミュニティ活動が行われる理由についての以下のような前施設長Ｗｓの発言を聞き、より強くなった。

「近隣との関係は良いことばっかりやない。(関西地方のある地域に診療所を開設しようとした）国際的な医療団[4]も反対運動されている。近隣や議員の利害がぶつかってややこしい、と聞いた。保育所警備をやってるＡｎ（施設ＯＢ）も、（Ｚ施設の近所の公立小学校区で）児童安全活動をやってるＢｎやＣｎもＺ施設の人であるってこと知らん人が多い。彼らが元ホームレスって言うてない。そうせんと何言われるかわからんとこあるから。Ｚ施設の人だとわかったらどうなるかわからんところがある、と正直思うてる。ここが迷惑施設[5]であると思う人とのせめぎ合いの連続。それがずっと続いているのが現実。こっちのやることで評価を出して地域に認めさせていく。それ以外にはない。毎日毎日が、せめぎ合いの連続なんや」[6]

コミュニティの人々に施設の入所者を知ってもらう、入所者に自信と能動的態度、社会生活力を身につけさせる、等の理由以外に、「評価を出して地域に認めさせる以外にはない、せめぎあいの連続」と前施設長Ｗｓをして言わしめる実情が察知できたのである。

本稿では、主として喫茶事業ウェイトレスとして接した中での聞き取りから収集した事実や言動から立ち上がるせめぎ合いの諸相を、筆者なりの解釈によって記述していく。演繹的な方法ではなく、ある集団に付随する一貫しない現実に立ち現れる言動の意味を考察するように努めた。

語り手は、入所者やＯＢ、職員、ボランティア、近隣住民、小学校関係者、医療団所属の看護師等、多岐にわたっている。期間は2005年５月から翌2006年10月にまで及んだ。語り手の会話を記す際に、不適切と思われるかもしれない言葉もそのまま引用してある。会話は、録音機器によって残されたものではない。喫茶事業終了後、すぐにＺ施設近隣のファーストフード店に直行し、話された言葉のやりとり、場面等についてのメモをつくり、帰宅後、パソコンノートに文章として書き取っていく、という作業によって残されたものである。一連のこの作業は、毎週木曜日の喫茶事業に参加するたびに行われた。

文中に登場する主な人物は、以下に一覧した。全員アルファベットで表記し、固有名詞や地名等についても、特定しにくいよう記述した。入所者や施設ＯＢはＡｎ～（ｎは入所施設の頭文字から)、コミュニティの人々はＯｃ～（ｃはコミュニティの意)、施設職員はＷｓ～（ｓはスタッフの意）である。表に列記した人以外にも、国際的医療団看護師、小学校の関係者、小学校５年生たち、地域の顔役さんと呼ばれる人々Ｚ施設職員からも、多くの情報を得ることができた。

彼らが経験してきた生の現場は、思いがけないきっかけで語られることが多い。筆者の側から、彼らの仕事等の経歴、Ｚ施設に入所するに至った経過、飲酒習慣、家族や家郷の人々との過去における人間関係等を聞くということはつつしんできた。このことは、2005年５月、参与観察当初に、施設職員から筆者に対して直接申し渡されていたことでもあった。

Ａｎさん　施設OB　Z施設を含む社会福祉法人の保育所警備の仕事に従事。
Ｂｎさん　入所者　40歳代　児童安全活動に従事　全身に22もの病名を持つ。
Ｃｎさん　入所者　60歳代　児童安全活動に従事　断酒会に所属して酒との闘いを継続中。
Ｄｎさん　入所者　高齢者配食サービス　火曜日・木曜日担当。
Ｅｎさん　入所者　高齢者配食サービス　水曜日・金曜日担当。
Ｆｎさん　施設OB　施設のすぐ近所に住む　自分が負け犬であるとの認識を何回も語ってくれる。
Ｇｎさん　施設OB　喫茶と縫製ボランティアのメンバー　競艇よりボランティアが大事。
Ｈｎさん　施設ＯＢ　空き地農園担当　近所の保育園児に農園での芋掘り大会を提供。
Ｏｃさん　近隣男性　60歳代　喫茶常連　高さ20センチのマイカップ２個持参。
Ｐｃさん　近隣女性　30歳代　喫茶常連　マイカップ４個と小学生の息子と共に。
Ｑｃさん　近隣女性　舅の代からの地域の顔役　50年以上居住　Z施設との繋がり極めて強し。

Ｒｃさん　近隣女性　70歳代　高齢者配食サービスでは利用者と入所者との間に立つ。
Ｓｃさん　近隣女性　70歳代　QcとRcとの喫茶での午後のお茶を楽しむ。
Ｔｃさん　縫製ボランティア３人のリーダー格　内職で縫製の仕事をしている。
Ｕｃさん　縫製ボランティア　ウエディングドレス専門の仕立屋さん。
Ｖｃさん　縫製ボランティア　一番の若手。
Ｗｓさん　前Z施設長　強力なリーダーシップを発揮する　筆者にとってのゲートキーパー。
Ｘｓさん　Z施設前主任　地域とZ施設との橋渡しを実にこまめに行う　2006年他施設へ転勤。

Ⅰ　Ｚ施設とコミュニティ

Ｚ施設は、過酷な生活を送ってきた人々に、生活や医療のサポートを行い、社会復帰を支援することを目標とした更生施設である。定員は140名、入所者の平均年齢は2005年時で51歳である。利用者のほとんどは、日雇い労働という雇用形態で、失業と隣り合わせの不安定な生活を送っていた単身男性である。彼らの多くは、1960～70年代の高度経済成長期に仕事を求めて都市に来て、製造業や土木建設業にたずさわってきた人々であるといえる。

高齢者配食サービスや喫茶事業、道路清掃、空き地を利用した農園園芸等、コミュニティへの活動も活発である。30を越える施設内作業も行われている。また、医師の許可を受けた場合には、施設外作業も可能である。「ここ（Ｚ施設）にいる人間かてみんな言えへんだけで、地面で寝たことのない奴なんかいいひんねん。みんな黙ってるだけなんや」[7] という発言からも推測できるように、野宿生活の経験をほとんどの人が持っていると思われる。

区勢現況[8] によると、Ｚ施設のある区内は19の行政的地区に分かれている。その中でもＺ施設のある地区は、昼間の流入人口が際だって多い。2000年度国勢調査によると、当地区は世帯数が5434世帯、人口は１万1744人で、1995年度国勢調査時より、881人増大している。Ｚ施設がある中学校区での老齢人口は、ほぼ他地区と同じで、65以上人口は約1400人、完全寝たきり高齢者が約20名、一人暮らし高齢者は約300名程である。被生活保護世帯数、被保護人員共に、区内で圧倒的に多い[9]。

地区内で民生委員をしてきた女性は、「この辺、貧乏な人が多いんよ。毎年歳末助け合い運動の時、ここの地区からお金集めてそれをまた社協（社会福祉協議会）で集計しなおして社協が困った地区にようけくれはるねん。この辺、（社協に）持って行くお金は一番少ないのに、貰ってくるのは一番多かったから、よう他の地区の役員さんに皮肉言われたわ」[10] と話す。地区内には、女性会、保護士会、ネットワーク委員会、社会福祉協議会、連合振興町会、連合赤十字奉仕団等の組織が運営されており、Ｚ施設と協働することも多い。

次に３人の住民の言動から、彼らがＺ施設をどう見ているのかについて記述する。

近隣に住む60歳代の男性Ｏｃさんは、夫婦で自営業を営んでいる。喫茶には、高さ20センチほどのマグカップを２つ（自身と奥さんの分）持参してくる。たっぷりのコーヒーとミルク、砂糖、袋ごとの菓子を毎週持ち帰る。この菓子は、喫茶で注文すると必ず貰えるものだが、通常はお客１人につき１個である。菓子を袋ごと渡すのは、Ｚ施設職員の地元客への厚意である。１杯100円のコーヒー２人分（200円）で、菓子１袋と20センチのマグカップ２杯分のコーヒーは、非常に安価である。マイカップ持参で、毎週喫茶にやって来る地元客は、他にもいる。小学生の男の子を連れてくる30歳代Ｐｃさんの場合は、トレイにのせられたマグカップが４つ。勿論、菓子は袋ごと職員の手から小学生の男の子の手に渡る。

Ｚ施設近辺に居を構える女性Ｑｃさんは、喫茶の常連である。50年以上この地域と共に生きてきた。彼女の語り[11] からコミュニティのＺ施設への視線の一端が推測できる。筆者の興味を引いたのは、入所者やＯＢへ注がれる視線と、職員への視線の相違である。

厚労大臣からの、長年にわたる地域貢献活動への感謝状が、自宅居間にある。同居していて、すでに亡く

なった彼女の舅が、長年、町内会役員を務めていた。Ｚ施設が設置された時には、設置に反対する近隣住民と施設側との話し合いのため、自宅を提供したという。

「近所の駅の近くに空襲で焼け出された人の収容所があって、その人らを泊める施設が今のＺ施設がある場所にあったんよ。それがＺ施設の始まりやね。舅とずっと前の施設長とが親しかったんで（建て替えてしまった）前の家の玄関先で、（近隣住民とＺ施設との）話し合いをしてはったよ。（Ｚ施設設置に反対の）隣組とＺ施設との間で舅が難儀してたわ」

入所者やＯＢが亡くなった時のこともこんなふうに話してくれた。

「葬式の時、（家族や親族に）来てくれ言うても本当の住所を言わない人も多いから、その人たちの葬式も舅が尽力してやってたよ。隣組に相手されへん悪い人もおったもん」「電車賃が足らん、って言うからお金貸したら、次々と（他の入所者が）やって来るねん。あのおばちゃんやったら貸してくれるって伝えるんやね、仲間うちで。私みたいなもんに嘘つくなんて何とも思うてない人もいるからねえ。実際にはそんなんぎょうさんいてはる」

次の２例のように、Ｚ施設の職員に対しては好意的である。

「働かんと病気や言うて、にせ病やって（詐病して）病院へ行って、税金使うてから生活保護受ける。それ（生活保護受給）を期待している人も多いんよ。こんな人もいた。働いてお金貯めて退所した人が、食べ物やらいっぱい買うて、Ｚ施設の友達を呼んで酒盛りするねんわ。施設にいるときはお酒は飲まれへんやんか（Ｚ施設内は禁酒が鉄則である）。ここは自分の部屋やから酒飲んで何が悪いって言うねん。（Ｚ施設前主任の）Ｘｓさんが言うてきかせても（説得しても）お前に世話になってないって、夜中まで。しまいには（私の）家まで文句言いに押しかけて。怖いから、警察の電話番号書いて壁に貼って、鍵しめて、シャッター閉めて。昔は福祉、いうたら、むりやり働かせたり、部屋に閉じこめたり、してたけど、今はもうほんまに逆で、職員の人の方が、貧乏なくらいやわ。Ｘｓさん、可哀相で気の毒やったよ。ほんまに難儀してたよ」

「すぐ近所に（Ｑｃさんの家の横道から８メートルほど入った路地）古い家が荒れたままにしてあってね。家主は別のところに住んでるんよ。（家主は）解体するのもお金がいるし、ほったらかしやった。それ（解体と撤去作業）をみんなＺ施設の人がやってくれたんよ。Ｘｓさんが施設の人10人くらい集めてくれてやってくれた。３年くらい前の暑い時で。解体屋さん頼んだら100万円はかかるよ。（解体してくれたお礼の）お金は３万円くらいやったと思う。ほんまにお昼ご飯代だけ。それくらい出してやってって、Ｘｓさんに言われて。暑い時やったんやわ。私が頼んだんやわ、Ｘｓさんに。だから私は罪人やわ」

近隣女性Ｑｃさんによるこれらの発話をもとに、入所者やＯＢたちへの否定的感情表現について、考察を試みる。

まず、彼らを既存の地域社会が持つ一定の秩序や均衡を脅かすよそ者と認識し、排除しようとする意識があると考えられる。また、入所者・ＯＢは単なるよそ者ではなく、一般に流布されていると思われる偏見にもとづくイメージや、それに基づく誤解[12]によって捉えられている。それゆえ、否定的な感情はいっそう決定的なものとなる。電車賃が足りないと言って借金をしたり、本当の住所を教えなかったり、働かず生活保護受給を待っているかのように解釈したり、退所後に酒盛りをして近隣に迷惑をかけたり、といった批判は、直接的にはＯＢに向けられている。しかしそれは、施設職員Ｘｓへの「可哀相、気の毒、難儀してた」という言葉にみられるように職員への同情、あるいは入所者達に献身する職員への賞賛として表明されている。同様に、古家解体の作業を行ったのは入所者であるにもかかわらず、彼らへのいたわりは少なく、施設職員へは「私が頼んだんやわ、Ｘｓさんに。だから私は罪人やわ」という言葉に見られるように、過剰な表現をとる。

Ⅱ．Ｚ施設の地域活動とその考察

1　関係性支援の必要性

喫茶事業で会ったＡｎさん（施設ＯＢ）は現在、ある社会福祉法人経営の保育園で働いている。彼は、Ｚ施設ＯＢであることは「表だって言うことではない。保護者のこと考えるとやらんほうがええ」[13]と話していた。又、初めて喫茶事業に行った時、こちらから話してはならない話題はあるかという筆者の問いに対して、職員は言った。「まずお酒。ここは禁酒ですから。あと、故郷、家族。何してたの、どんな仕事してたの、はだめ」[14]。故郷や家族、仕事等、個人の経歴に関することを話題にするのは止めろというのであった。

こんな事例もある。Ｚ施設玄関口にはピンク色の公衆電話がある。その上には次のように書かれた看板がある。「０××－△×△×－△×△×　この電話番号は求職活動でＺ施設の住所がわかると困る時使って下さい。履歴書に書いてもらってもかまいません」

この電話を受けた職員は、Ｚ施設です、と答えてはならない。Ａｎさんの発言や公衆電話の事例から、入所者は社会において身分を隠さねばならない存在であることがわかる。

このような現状をふまえて、前施設長Ｗｓは、人と人との関係性支援の重要性を、「自分を表現したりコミュニケーションを取りながら、自分と友達とのつながりをつくってもらいたい」と語る[15]。そして、「うちでは就労支援ということを一貫してやって来たが、それだけではいかん。つながりを作ってもらわんと。仕事が続いていったり、生活も乱れないような良い人間関係を作っている人は、結局、定着性が強い」と、長年の経験から生まれた考えを付け加える。また、喫茶においても「ここ（Ｚ施設）に来ることになった者同士が（喫茶で）話しすることが大事やねん。そんなＯＢは人間関係つくれる人やね。そんな人はやっぱり、仕事も続くし、生活もきっちり出来ていくね」[16]と、前施設長と同じことを話すＯＢが実際にいた。

良い友達、人間関係を作ることが仕事やコミュニティへの定着性への近道であり、退所後に再度路上生活に戻らない環境を作るのだという、彼らの考えが理解できる。また、前施設長とＯＢの両者が共に人間関係の重要性を強調しているという発話から、Ｚ施設内部で、関係性支援という行為に関連して交わされたであろう対話や意思の疎通があったことが推測できる。このようにして個別的で具体的な入所者と地域住民との接点をつくるため、個々の入所者を知って貰い、彼らがコミュニティのあちこちで何かに取り組んでいる光景、即ちＺ施設による地域活動を定着させることの必要性が認識されていった。就労継続や安定した自立生活が行われるために、何よりも、再び路上生活に陥らせないために、彼らにとって唯一の社会資源である人と人との関係性支援が、Ｚ施設では意識的に模索されていったのである[17]。

2　Ｚ施設からコミュニティへのかかわりに関する活動

(1) 迷惑施設

Ｚ施設は、コミュニティに溶け込もうと懸命に努力している。そのための活動として、喫茶事業、小学校児童安全活動、道路清掃、空き地を利用しての農作業等がある。このような活動を行うに至るまでには、Ｚ施設がコミュニティにとって迷惑施設であると認識されてきた経緯がある。

「ここ（Ｚ施設）の前、昔はこの辺の人は通らんかった。子どもらにもここの前、親が通らせなかった。老人ホームみたいな施設やったら、そうでもなかったかも知れんけど。やっぱり寄せ場に居った人が居るいうことで。この辺、そんなとこやった」というＸｓ前主任の言葉[18]にも、Ｚ施設がコミュニティに受け入れられることが困難であったという事実がうかがえる。

近隣女性も言う。「喫茶が出来た時も近所の人からはあのへん通らんときって言われてた」「職員さんはええ人が多いんで話しするけど施設の人には話しせんかったもんやわ」「（喫茶が行われるＺ施設裏庭の）裏門が開いたのも喫茶がはじまってからやわ」[19]。

前述した近隣女性Ｑｃさんが「舅とずっと前の施設長とが親しかったんで、（Ｚ施設設置に反対する）隣

組とＺ施設との間で舅が難儀してたんは、よう憶えてるわ」と語っていたように、Ｚ施設も開設当時は地元の反発を受けて、既存の福祉施設の２階部分に同居せざるを得なかったという経緯をもっている。その後も長く地元にとっての迷惑施設と言われ、地域清掃をしていても、朝早くから玄関前でゴソゴソするなと断られる状況が続いた。前施設長がある雑誌に掲載していた記述によると、地域に受け入れられたきっかけは、周辺の高齢化に伴うニーズを考え、高齢者配食サービスを行ったことであったという。

この前施設長の記述を確認するため、Ｚ施設からコミュニティへの活動を２例、取り上げながら、Ｚ施設によるコミュニティ活動の意味を考察してみたい。

(2) 児童安全活動

コミュニティにある公立小学校への児童安全活動は、2004年に開始された。活動の協力者は、2004年末で152人である。活動を行うことによって、子ども達に安心感を持ってもらい、防犯意識の高い地域であることをアピールすることを目的としている。

具体的な活動として、登下校時、自宅近くや指定場所の街頭で児童安全活動腕章をつけての声掛けや見守り、不審者（車）、ひったくり、子どもの連れ去り等を目撃した場合の警察・小学校への通報等がある。このような地道な活動の結果、近隣での犯罪件数は激減したという。児童安全活動を行っている組織の中心が、小学校と保護者、連合振興町会である。児童安全活動を行うために、上記した３者以外にも、民生委員、児童委員、ネットワーク委員会、青少年指導員、防犯協会支部等が密接に関係している。

40歳代のＢｎさんは、児童安全活動に参加する理由を、Ｘｓ前主任にやってみないかと言われたからとか、子どもが好きだから、等と何回も筆者に語っていた。しかし、ある日の喫茶時、Ｂｎさんから、「(自分を取り巻く）環境を変えたらって。そう考えた」「身体、しんどかっても環境を変えたら、ぼくの人生、なんか、ええことあるかなあって。そない考えた」[20] からこの活動に参加しているという言葉を聞くことができた。全身に22もの病名を持つＢｎさん自身を変えることの出来るような要素が、児童安全活動をすること自体に潜んでいることを、彼自身、自覚していることが理解できよう。

Ｂｎさん、Ｃｎさんは何を思い行動しているのか、言動を記述し、考察する。

毎朝７時50分に施設を出て、小学校まで歩いていく。二人の腕には腕章があり入所者が活動するときには必ず身につけるユニフォーム（オレンジ色のジャンパー、水色のＴシャツ。Ｚ施設の名前が記されてある）を着ている。このユニフォームの着用は徹底しているようで、高齢者配食サービスの時も喫茶事業の時も例外はない。Ｚ施設に出入りするボランティアや福祉を学ぶ実習生にも、必ず着用させている。８時くらいから登校が始まり、８時15分くらいが登校のピークである。４車線道路と１車線道路が交差する横断歩道に警棒を持つ二人が立つ。

毎朝、登校時に交通量の多い横断歩道で、子ども達の安全のため交通整理をしている60歳代の入所者Ｃｎさんは、得意げに活動を続ける。彼の言い分はこのようなものである。警棒を持ち、腕章をつけている自分たちのような男が、毎朝同じ横断歩道に立ち、登校時間が過ぎたら歩いて帰る。そうすることだけでも、悪事を働こうとしている人間には迷惑な事なのだ。もしも自分が悪い人間だとすれば、どこかよその場所で悪事をしようと、かならずや考えるであろう。

続けて、施設の日帰り旅行参加のため、児童安全活動を休んだ翌日のことを次のように話す。「(日帰り旅行の）翌日の朝、何人もの小学校のお母さんたちから、昨日なんで（通学路に）おらへんかったん、て声かけられてなあ。皆が心配したって、そない言うてくれはってなあ。ふたりとも（ＢｎとＣｎが児童安全活動を）休んだん、その時がはじめてやったから」[21]。

Ｃｎさんは20歳代の時、車の加害事故を起こした際にレントゲンを何十枚も撮ったため、その後遺症で、「精子が足らんようになってしもうて」子どもを持てなかったと考えている。40歳の時、再婚同士で５歳年上の女性と結婚したが、Ｃｎさんが53歳の時死別。その後、「たががはずれて」寄せ場での人生を過ごす。そして、「みんなで酒、飲んでて、連れの奴がふたり、喧嘩始めよったんや。まあ、やめとけって、止めに

入ったら、一方の奴が鉄のパイプ棒、振り回しよって、それがわしのここ（右肩）を貫通したんや。それが、痛うて、痛うて」アルコール依存症になり、精神科医による治療を受けるようになった。現在も断酒会に継続して所属し、「ここ（Ｚ施設）を出てからが（依存症との）勝負や」[22]と話す。

ＢｎさんとＣｎさんは、小学校に呼ばれ、講堂の壇上で学校長から、この腕章を着けているおじさん達には挨拶をするように、と話されたことがあると話す。Ｚ施設の入所者であるということは校長から話されるのかと尋ねると、言葉をにごす。喫茶にやって来た彼らに何回か尋ねてみたが、Ｚ施設以外の人もみんな一緒に講堂に行ったからとか、児童安全活動を行っているのは自分たちだけではないから等、毎回、曖昧な返答が返ってくる。

児童安全活動を行う、二人の行動の意味を探ってみたいと思う。

活動時、ＢｎさんとＣｎさんは登校する児童、付き添いの保護者、巡回中の警官、校門に立つ教員たちに取り囲まれている。そんな人々の存在やまなざし、発言自体が、２人の行為に自覚的、あるいは無自覚的に影響を与えるであろう。人々の存在やまなざしや発話の中に、自分たちへの肯定的評価がなされる事への切なる希求が、彼らの言動には見え隠れする。それは自分たちに敬礼してくれる警官や児童安全活動を休んだことに心配してくれる母親たちへの発言に顕著に見られる。その希求は、Ｚ施設にいる自分への否定的評価を払拭するため、より切実なものとなるのではないかと思われる。

自尊心は多くの場合、複数の主体の間で行われる相互行為によって育まれるものであろう。しかし、他者のまなざしによって個人の内面が影響され、さまざまな自己否定感、疎外感が生まれることも事実である。小学校に呼ばれて講堂の壇上に上げられた、とＣｎさんは語った。その時、Ｚ施設の入所者であることを校長からは話されるのかと、筆者が何回も問うた際、言葉を濁して答えなかったのは、そんな他者からのまなざしをＣｎさん自身が甘受し、彼の心理が影響を受けているのためだと考えられないだろうか。なぜならば、自分の装いや立ち居振る舞いを吟味した上で、他者に見られ、聞かれ、児童安全活動という公的領域にあらわれることによって、彼の存在感とでもいうべきものが形成されるのではないかと考えるからである。

入所者による児童安全活動への反応に関して、小学校関係者と近隣女性の話しを聞いた。

小学校関係者によると、学校とコミュニティとはつながりが強く、小学校で行われる夏祭りでも、近隣に住む卒業生たちが独自の出店を出す等、自分たちの後輩の育成にも熱心であると言う。この関係者からは、「循環した人間関係ができていると思う」[23]との言葉が提示された。その際、児童安全活動を行ってくれる人々への感謝の表明はあった。しかし、インタビュー申し込み時に、筆者がＺ施設の喫茶事業を通じて児童安全活動を知ったと予め文面で知らせてあるにも関わらず、約40分のインタビュー中、Ｚ施設の人も協力してくれているとか、児童安全活動にはＺ施設入所者もいる、などという言葉は一度も出てこなかった。この点はインタビュー申込書作成の際、前施設長との打ち合わせ時にも予め示唆されていたことではあった。実際に経験するところとなったのである。

近隣女性Ｑｃさんは、次のように語る。「このあたりは、市営住宅もあるし、若い人が多いから子どもも多いわね。あんなふうに（児童安全活動のこと）やってくれたら、親は、あれちゃう、ありがたいんと違う？いろんな人（コミュニティの人やＺ施設の職員）がいろんな立場で努力してきたんよ。地域の掃除、植木の剪定、祭りの手伝い、そんなふうに貢献してくれる姿勢が何年も何年も続いたら、人情いうの、そういうのんが出てくるやんか。主任のＸｓさんなんか、ほんまにこまめやったよ、私らのグループのカラオケに来たりして。昔みたいにここ（Ｚ施設）はここ、地域は地域、いうような分け方はしてないと思うんやけどね。せやけど、ここ（Ｚ施設）の人に、私、脅されるようなこともあったんよ。こんなん言うたらなんやけどここ（Ｚ施設）の関係のややこしい人が家に来たこともあった。お金貸してくれ、言うて。２、３回。千円、２千円くらいやけど、ねえ。近所のアパートの住所書いて安心させといて、住所に書かれたアパートに行ったらそんな人いいひんかったり、ねえ」[24]。

以下において、地域からの正直な反応といえる近隣女性Ｑｃさんの発言や、インタビューにおける小学校関係者の語りからくみ取るべき事を、規範[25]という観点から考えてみる。規範とは判断・評価・行為など

の取るべき基準のことである。

児童安全活動に対する保護者達の謝意や、その結果として人情が出てくるという発言からは、努力してコミュニティに貢献するＺ施設に対しては、差別をしてはいけないという、広く社会に行き渡っている規範に同調するという意識が表現されている。「昔みたいにここ（Ｚ施設）はここ、地域は地域、いうような分け方はしてない」という言葉は、コミュニティにおける福祉施設への差別はない、という言明である。しかし、お金をせびったり、本当の住所を教えないというような社会的逸脱者に対しては、一線を引き、否定的アイデンティティを付与して忌避している。長年民生委員をしてきたＱｃさんのような人物が属する集団の規範にも、彼女はやはり同調しているのである。そして、人情がわく、と話したその後で、お金をせびられた、本当の住所を教えない、といった話題が出されることに、コミュニティにおけるＺ施設へのアンヴィバレンツな評価が推測できる。

単に近くに住んでいるという物理的距離と、人との親近感をしめす社会的距離[26]とは区別して考えなければならないということを知ることができる。Ｑｃさんや小学校関係者とＺ施設との間には不可視の障壁が存在するのではないかと考えられる。

(3) 高齢者配食サービス

高齢者配食サービスは、1994年より開始された。この事業は、行政からの助成金がつくという見込みで見切り発車されたが、民間との競合のおそれがあるということで結局叶わず、社会福祉協議会から１食につき150円の助成のみがついた（2006年現在200円）。利用者負担は、250円である。光熱費や配食についての様々な人件費等は、Ｚ施設が負担する。Ｚ施設が金銭や人員を持ちだしてコミュニティへの貢献活動を行うという構造は、前述した喫茶事業や古家解体と同様である。

午前11時半、昼食を配るためＺ施設玄関前から三輪自転車をこぐ入所者２人のうち、Ｄｎさんは火曜日と木曜日、Ｅｎさんは水曜日と金曜日の担当である。地区内の利用者は、計19人。「当日１時までにお食べ下さい　Ｚ施設」と書かれた直径５センチほどのタグのついたゴムひもが、松花堂弁当箱を囲んでいる。配食される弁当は、Ｚ施設内にある厨房で作られている。三輪自転車の荷台にプラスチックケースに収められた松花堂弁当と、別の保温容器にご飯とお汁を載せて、地区内の定位置、５箇所で待っている民生委員や住民たち、総合的な学習の時間を使っている小学校５年生の子たちのところへとペダルをこぐ。ＤｎさんやＥｎさんは、スーパーで使われている黄色いプラスチック製籠に利用者の数だけの松花堂弁当、ご飯、お汁を託す。定位置で待っている人たちは、入所者から手渡された籠に入った弁当を受け取り、会釈もせず、小学校の子ども達に配達を割り当てる。１グループで２～３食くらいの弁当を自宅にいる利用者に手渡すのが、小学５年生たちの役割である。

この活動から、児童達はどんなことを学んでいくのだろうか。小学校関係者へのインタビュー時に資料として提供された小冊子[27]から２例抜き出し、彼らの反応を読み取る。

「地域の高齢者の家に、昼食のお弁当を配るお手伝いをしました。オレンジ色のジャンパーを着た人からお弁当を受け取り、地域のボランティアの方といっしょに１軒ずつ配りました」

「お弁当を持って行きました。地域のお年寄りの家に、昼食のお弁当を配る手伝いをしました。自転車で運んでこられたお弁当を、ボランティアの方々といっしょに受け取り、１軒１軒配って回りました。お年寄りとの交流だけでなく地域の方々の存在も知りました」

高齢者との関わり、ボランティア活動、地域で育つ子どもたちの成長、ともに生きる等という項目欄に、高齢者配食サービスについての記述が、６冊の小冊子の中で11箇所ある。配食するＺ施設入所者や施設職員の写真（彼らの顔も写っている）も６枚掲載されている。だが、Ｚ施設という字句は１度も文中には使われていない。そして、小冊子では、配食サービスを行っている入所者達は、「オレンジ色のジャンパーを着た人」とのみ記述されている。

2006年２月16日、23日の両日、筆者は自身の学生証を首からつり下げて、身分と名前を配食地点で強調し

ながら、入所者が漕ぐ三輪自転車と一緒に走り回ってみた。すると配食サービスの定位置現場にいたＲｃさんは後日、近隣女性Ｓｃさんと一緒に喫茶事業にやって来た時、「このあいだからよう見る、配食サービスの人やんか」と向こうから声をかけてきてきた。それを機に話しを聞くことができたので、（筆者と一緒に）配食していた入所者の名前を知っているかどうかを尋ねてみた。「いや、そんな、名前なんか知らんわ。最初から聞いたことないわ」[28] と二人共が話す。配食する三輪自転車の入所者（Ｄｎさん、Ｅｎさん）の名前は「尋ねたこともない」と言う。首から下げていた学生証を見て、筆者の名前を憶えてくれていたＲｃさんからのこの発言には、とまどいを感じた。

三輪自転車で配食サービスを行う入所者が、直接各家庭を訪問して手渡すということはしないことになっている、とＤｎさんもＥｎさんも口をそろえる。コミュニティ内５箇所の定位置で待機している民生委員が介在する必要性を筆者は理解できず、直接お弁当を食べる人に手渡したいとか、そのほうが便利だとか思いませんか、とＤｎさんに尋ねてみた時のことである。

「まあ、家の中で寝てる人（寝たきりの人）とかがいるんやろうし、わしらみたいにいつまで続くかわからん人間に、家を教えるのが嫌なんと違うかなあ。何年もやってくれるのかどうかわからん人間やと、思うてんのんと違うかなあ。Ｚ施設の人間やいうことでなかなか信用して貰えんところも、あるかもしれんわなあ。いやっ、わからんでっ。わしがそう思うとるだけで。わしらはここからここまでやってって言われたことやるだけやし。せやけど家の中にわしらみたいな他人を入れるいうのんは、けっこう、あれちゃう、嫌なんかもしれんで。せやよって家の中の事情、よう知ってくれてる近所の世話役（民生委員たちのこと）さんが、毎日頑張ってくれてるんのと違うかなあ」[29]

Ｄｎさんのような発言は、喫茶でもよく聞く。Ｚ施設に入所している事で地域の人から信用されないことや、医療関係者からもまともに扱われないこと[30] を、自分が受け取った解釈のまま甘受する。まともに扱われないことのみならず、自分自身で社会の落伍者であると考えている施設ＯＢもいる。Ｆｎさんがそのひとりである。

Ｆｎさんは64歳。いったんは就労自立したが、ある日から真っ暗な自室に籠もりきりになって、精神にも変調を来すようになった。心配して部屋を訪れたＯＢ担当の職員が生活保護受給の手続きをし、現在は施設の近所に住む。喫茶の時こんな発言を聞いた。「一番偉いのはやな、土を耕してる人。地震になっても、仕事がなくて金がなくなっても、自分で自分の喰う分をつくれることほど強いことない。グルメでなくてもええねん。弱い者いじめて、強い者には何にも言わんといてるより、よっぽど上等や。生活保護、受けて、負け犬の俺が言うのんも、なんやけど」[31]。負け犬という言葉を、彼は何回も言う。

コミュニティでの高齢者配食サービスの現場では、活動する入所者は無名の存在である。人にとって、なくてはならない、かつ、許されてあるべきことは、各自の存在が、相互に承認され、確かめられることである。配食サービスでの近所の世話役さんたちや、他の生活場面での医療関係者等、周囲の人は何気なく言葉を発し、そして忘れる。時と場所は異なっても、そんな言葉を発せられた人々は、その言葉を唐突に思い出し、負け犬と自らを呼ぶ。そのような事象を呼び起こすようなはたらきが、Ｚ施設を取り巻く環境にはあるのではないか、と筆者には思われる。レイン［1979］が書くように、Ｚ施設に集う人々の何人かは、何よりも承認を求めて絶叫しているのかもしれないのである。

次に、Ｚ施設関係者が活動時、着用するユニフォームについて、若干の考察を行いたい。

地域性や血縁性（出自）から切り離された人たちのいるＺ施設が用意するオレンジ色のユニフォームは、施設の存在を周囲に印象づけ、活動を価値づける装置であると考えてみると、このユニフォームを着用することによって、本来は生じるはずの個人への関心が薄れ、名前を覚えるというような個人的関心が払われにくくなるというネガティブな面が生まれるのでは、という推測が成り立つ。

一方、ヤクルトおばさんという呼び名が一定の表象を帯びるように、訪問販売や宅配の担当者はその素性を知られつつ、親しみと安心感をもって受け止められねばならない。しかし、ヤクルトおばさんと高齢者配食サービスは、有給の仕事と持ちだしのボランティア活動という相違があるため、同列に考えることはでき

ないだろう。入所者達にユニフォームを着用させることで、Ｚ施設がコミュニティ内で行っている活動であるということを示し、適度な関心を持って活動を見てもらうという、Ｚ施設の意図があるのではないかとも考えられる。一方で常にユニフォームを着用して、すなわち自己が存在している事を呈示し顔写真を撮られながら活動する入所者がおり、一方で彼らをオレンジ色のジャンパーを着た人とのみ認識し会釈さえしない人が、コミュニティ内には混在しているのである。

Ｚ施設玄関にあるピンク色の公衆電話の上に「０××－△×△×－△×△×　この電話番号は求職活動でＺ施設の住所がわかると困る時使って下さい。履歴書に書いてもらってもかまいません」という看板があることは既述した通りである。この事例と、ユニフォーム着用の事例から、Ｚ施設が現実の社会に対して、どのような対応をしているのかを以下に記すことにする。

ピンク色の電話を使い、就労への行動を起こすのは、Ｚ施設に何の関わりも持っていない不特定多数の人々、いわば広い世間に向けて対応を考えなければならない場合である。そんな場合にはＺ施設の存在を知らしめないように行動を促す。一方、近隣のコミュニティに対して活動を行う際には、Ｚ施設の名称がはっきりと印刷されたユニフォームを着用し、自分たちの存在を顕在化させるようにする。このように隠蔽化と顕在化の使い分けを行い、社会に向かい合っている、というＺ施設の対応法があるのではないかと考えられる。

人は、他者との具体的な関係性の中に存在するものである。周囲がある個人（入所者）をある表相（ユニフォーム）によって規定する以上、その外部からの規定を逆手に取って乗り越えようとする跳躍への試みが、Ｚ施設が行っているコミュニティ活動の原点なのかもしれない。

Ｚ施設の活動は関係性支援の重要性を意識して（金銭的・人的に持ちだしであっても）行われている。しかし、コミュニティからＺ施設への関わりは、Ｚ施設との関係性を構築しようとして意図的に模索されたものではない。あくまでも偶発的な契機から始まったものである。

次に、コミュニティの側から偶然に始まったＺ施設への関わりを、２例取り上げてみる。

３　コミュニティからＺ施設への関心やかかわり

(1) Ｚ施設ＯＢ受け入れ集合住宅の斡旋

コミュニティからＺ施設への関わりのひとつとして、施設ＯＢを受け入れるための集合住宅の斡旋がある。廃業後の鉄工所の処分に苦慮していた人が、Ｚ施設の近隣住民であるＱｃさんの知り合いにいたのである。Ｚ施設前主任Ｘｓからも、退所者の住居物件探しを依頼されていたこともあって、口利きをしたのだという。Ｑｃさんの自宅横、自転車２台も並んで通れないような路地をほんの10歩ほど歩いたところに建物がある。間口は２間あるかなきかの３階建てである。Ｑｃさんは話す。

「ここ（元鉄工所）の２階と３階を改装して、建物の前の路地も舗装して、施設を退所した人が住んでるの。そんなこと全部、施設の人らが自分らでやらはった。あの人ら、いろんな現場で働いてきた人が多いから、お手のもんやったよ。Ｘｓさんたちが、うちのそばの壊れかけの家を解体して運んでくれはったこと、言ったよね。解体って、お金かかるんやろう？それを３万円でやってくれたんやから。（斡旋したこと）近所から文句もあるけど、あんなふうにＸｓさんらにされたら、こっちかてせいへん（協力しない）わけ、いかへんやんか」[32]

建物を路地から見上げると各部屋の外窓に洗濯物がなびいている。干し物の種類とその量から、成人男性単身者の住居であることがわかる。施設ＯＢを受け入れる空間がコミュニティ内の人の働きかけによって存在したということは事実である。

(2) 縫製ボランティア

縫製ボランティアをしている、Ｔｃさん、Ｕｃさん、Ｖｃさん、施設ＯＢのＧｎさんと一緒に作業した。この活動は毎月定例２回、午前11時半から作業が終了するまで、13年間も継続している。Ｕｃさんは、ウエ

ディングドレス専門の仕立て屋で、Ｔｃさん、Ｖｃさんも、縫製の内職仕事を行っている。この３人と喫茶スタッフでもある施設ＯＢのＧｎさんは親しいようだ。喫茶でもよく一緒のテーブルに座っている。彼女たちが喫茶にやって来ると、「おーい、Ｇｎさん、あんたの彼女が来たでー」という声が笑いと共におこるのである。このグループのリーダー格のＴｃさんは、柔らかい包装紙で作った高さ35センチほどの人形をＺ施設玄関先に飾ってくれる。傍らには「縫製ボランティアのＴｃさんが作ったものです」という但し書きがある。人形を見たと言う筆者に、「簡単に作れんであんなもん。あれなあ、ここは男の人ばっかりやんか。だから、スカートがめくられてもいいように、ペチコートも穿かしてあるねんで。ズロースも穿かしてあんねんで」[33] と言って筆者を笑わせてくれる。「どっかで安いズボン、買うてきはって、20何センチも裾あげすることあるよ。安いもん買えるとこ、よう知ってはるねんわ、ここ（Ｚ施設）の人は」と話す３人共、ある新興宗教の会員である。

畳敷きの談話室での作業の途中、Ｚ施設ＯＢ室の職員が顔を出し挨拶をしていく。先端に細い針金がついた、10cm×５cmくらいの白い紙のタグ（彼女たちはエフ、と呼んでいた）に、依頼者が希望する繕い方、箇所が依頼者本人たちの手で書かかれてある。縫製ボランティアの概要、彼女達とＺ施設との関係、地域の反応等は、彼女たちの語りから読み取ることが適切であろう[34]。

「動機？13年程前、町会長してたんや。Ｕｃさんと一緒にＺ施設の祭りに参加してたら、ひっどい身なりのおっさん連中がおったんやわ。綻びたところをホッチキスやガムテープで留めたりしていて。ようあんなこと（綻びの繕い方）考えると思うわ。そんなもん使うっちゅう発想が男の人やろう？（Ｕｃさん笑う）ホッチキスとガムテープやで。男の人って、そんなもんやんか。（繕いなんか）自分でようやらんやんか。そんで施設長のところへ行ったんやわ。やったげますわって言うて。そしたら施設長が、よろしくお願いします、って」

彼女たち３人の、構えのない、長期間にわたる縫製ボランティア活動の源泉は何に拠るのか。さらには彼女たちとＺ施設のような関係を可能ならしめたものは何か。高橋哲哉［2000］は、他者から発せられた呼びかけに応える（respond to）能力を持つことが、責任という概念につながるのだと記す。人と人とが共存し共生するための最低限の信頼関係として、呼びかけを聞いたら応答するという一種の約束があり、言葉を語り他者と共に生きてゆく存在である限り、この約束に拘束されるのである、というのである。責任（responsibility）という言葉の内実は、応答可能性という面から考察できるのである。

Ｔｃさんたちは13年前にＺ施設祭りで見たガムテープやホッチキスに他者からの呼びかけ（それは現実に発声されたものではなかったのだが）を聴き取り、その呼びかけに応答した。Ｚ施設が発する呼びかけ、訴え、アピールに応答してくれる人たちが13年も前からコミュニティに存在していたことは確かなことである。

Ｔｃさんは自分たちの活動に対するコミュニティの反応についても語り始めた。

「（活動を始めた）その当時から、いろいろ言われたよ。Ｚ施設みたいな、あんなところ出入りしてるいうて。あんなおっさんらとなんで付き合うのんいうて。（自分たち３人が新興宗教の会員だから）宗教がらみかいなって言われることもあった。今かいな？今でも言う人は言うよ。確かにそない言われてもしゃあない人もおったしな。せやけど、誉められるとか、認められるとか、考ええんでもええねん。私らのやってること、ここら辺の人、ちゃんと見てる人は見てるし、馬鹿にする人は馬鹿にしはんねん」

アマルティア・セン［1989］は、個人が基本的潜在能力（basic capability）を発揮するためには、どれほどの財を持っているのかどうかだけが問題ではなく、その財を使ってその人が社会の中で何をすることができるかに着目するべきであると指摘する。そして、ある人が共同体の社会生活に活発に参加するための潜在能力の在り方は個人の資質だけで決まるのではなく、社会が彼ら彼女らに提供することのできる財やサービス、機会によって決まると述べている。

３人の地域生活参加への潜在能力は、彼女たちが持っていた（宗教的）感性に裏打ちされた資質もあったであろう。しかし、Ｚ施設がコミュニティへ提供してきた日常的な働きかけ、活動を知らしめる機会の存在が、彼女らの活動を継続させる契機になったのであろう。

Ⅲ．せめぎあう包摂と排除のかたち

これまでの記述をもとにして、コミュニティとＺ施設との関わりの諸相について考察を行う。

先ず、人々が施設に対して持つ感覚について考えてみたい。Ｚ施設への関心が集団としての関心なのか、個人としての関心なのかを縦軸とし、関わり方における包摂と排除の占める割合の大きさを横軸として図を作成した。そこにコミュニティから施設への関わりの様相を書き入れてみた。（図１）[35] ここでいう包摂とは、集団が他者を同質化して、集団規範になびかせて自らの内部に取り込むことである。また、排除とは、集団が他者を異質化して、集団規範になじめなくして自集団外部に押しのけることである。

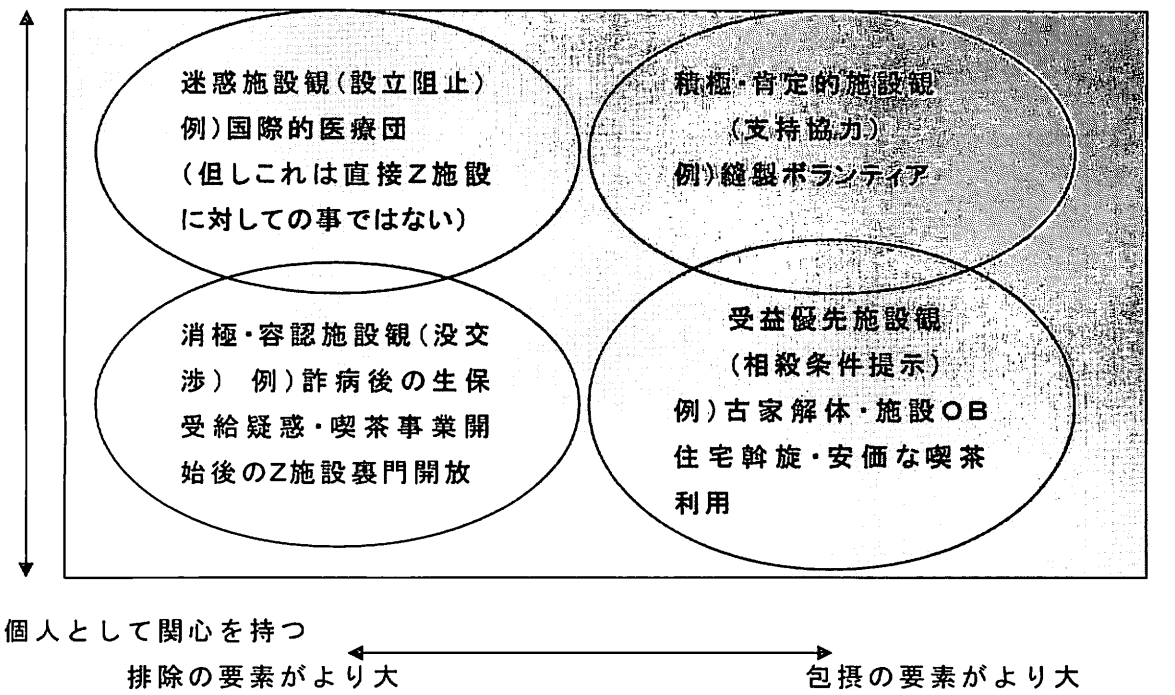

図１　コミュニティからＺ施設へのかかわりの諸相

国際的医療団診療所設立阻止にみられる迷惑施設観によるような状況は、現在のところコミュニティでは顕在化してはいないと思われる。しかし、前施設長Ｗｓは、国際的医療団の陥っている困窮が、Ｚ施設と無関係ではないという危機意識を常に持っている[36]。

また、Ｚ施設に対して関心を持ち続け活動している存在、つまり、善意による包摂志向を持つ積極的な支持協力姿勢は、縫製ボランティアの３人において見ることができる。

そして、喫茶事業が始まるまで開門されなかったというＺ施設の裏門のエピソードや、詐病後に生活保護受給を望んでいると言われる入所者達の評判、地域清掃の際も朝早くからごそごそするな、と言われてしまう状況等が、かつてコミュニティ内にあったことも事実である。これらは、状況如何では、いつでもＺ施設がコミュニティから排除される可能性があることを示唆しており、Ｚ施設存立そのものの危うさを表しているものであろう。

以上のような複雑な状況において、Ｚ施設はコミュニティに対して様々な活動を行っている。これまで具体的に記述してきたような、人的にも金銭的にも持ちだしのまま行っている高齢者配食サービスや、安価な喫茶事業、３万円という極めて安い対価でコミュニティ内の人々が対応に困っていた古家を解体・撤去・整

理したこと、個人として入所者が行っている児童安全活動、道路清掃、農園仕事等がそれらにあたる。このような活動によってコミュニティは利益を受けている。それら受益の見返りの例として考えられるのが、近隣女性Ｑｃさんによる施設ＯＢへの住宅斡旋ではないかと思われる。

縫製ボランティアのような、施設への協力は継続的に見られるものの、コミュニティへの受益があるのであれば協力を行う、更にいえば、Ｚ施設が行う活動によるコミュニティへの貢献度いかんでＺ施設への態度を決めてゆく（そしてその貢献度を査定するのはＺ施設ではない）、というコミュニティ側からの対施設観があるのではないかと考えられる。

次に、Ｚ施設からコミュニティへの関わりについての考察に移ることにする。

ここでは様々な立場のＺ施設入所者・ＯＢ・職員達が自分たちの姿を顕在化させたり隠蔽化させたりする度合いを縦軸とし、そんな彼らがコミュニティへ包摂されることに批判的であるのか、肯定的であるのかを横軸として考えてみることにする。（図２）

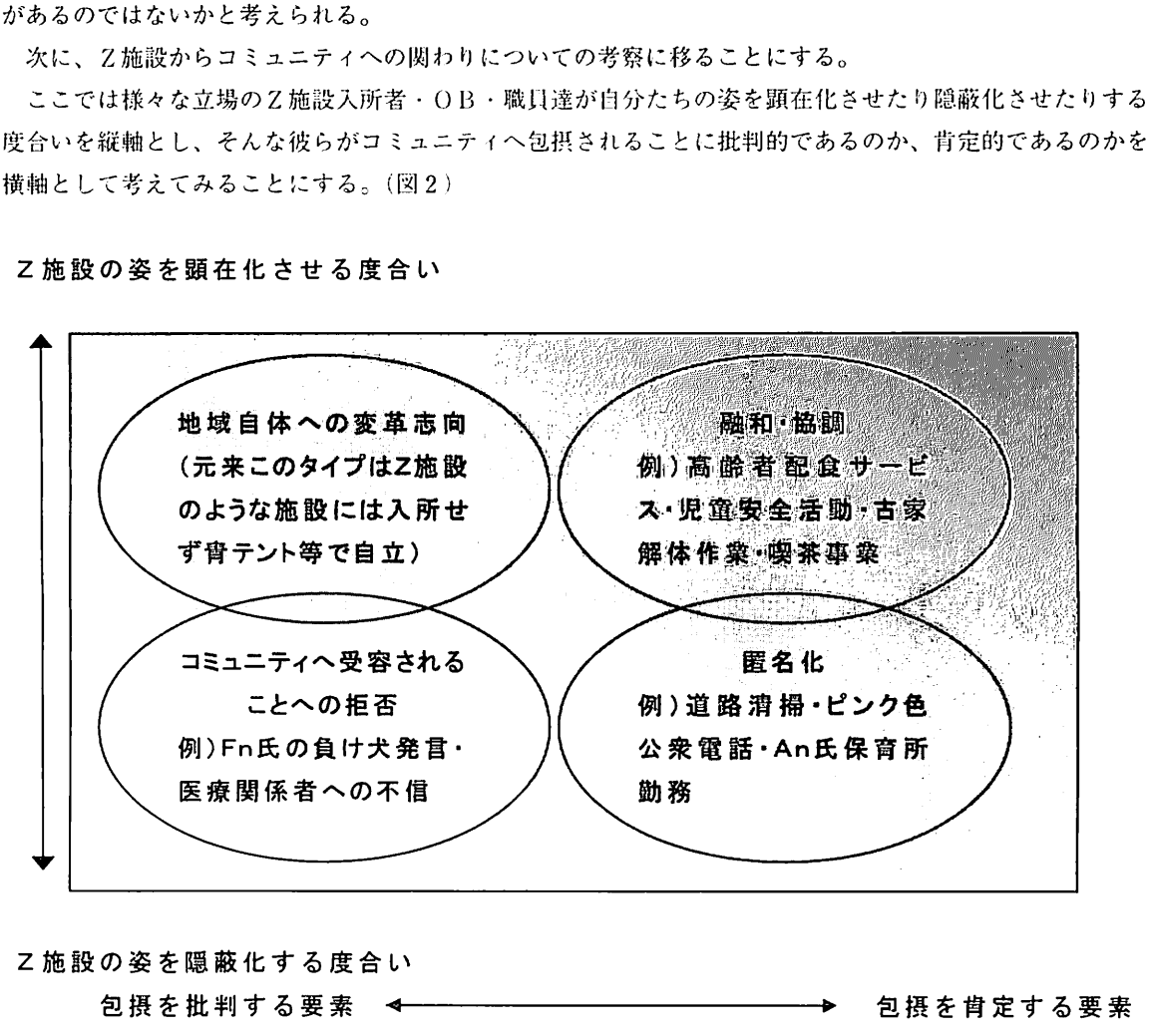

図２　Ｚ施設からコミュニティへのかかわりの諸相

個人としての入所者やＯＢがコミュニティに対して理解を求めることもなく、関わりへの関心も示さず、または、最初から諦め、包摂をされることを拒否・批判しているかのようなＦｎ氏のような態度・発言は確かに存在する。前述したように、自らのことを負け犬と筆者に語ったＦｎ氏は「一番偉いのはやな、土を耕してる人。自分で喰う分をつくれることほど強いことない。弱いもんいじめて、強いもんには何にも言わんといてるよりよっぽど上等や」と発言した。このような言動について筆者は、人に頼らず、弱者を貶めず、簡潔に生きたいという彼らの望みであり、なけなしの誇りをかろうじて持ちつつ生きていくための、彼らなりの姿勢としてとらえることが適当ではないかと考える。

また、ユニフォームも着用せず、ひとりで黙々と毎日２時間も道路清掃を続けるＯＢや、保育所での勤務を続けるＡｎさん等、独自に社会と繋がっているＯＢもいる。そのようなＯＢには、たとえコミュニティからの理解がなくとも自分なりのやり方で社会と関わってゆくしかない、その結果、社会に認められるか否か

は自分たちが決めることではないという、言外の心持ちが推量できる。

Z施設は金銭的にも、人的にも、持ちだしという形態を取って、コミュニティへの貢献を続けるべく尽力している。コミュニティからの匿名化作用を受けつつも、持ちだし構造を温存してでも、様々な活動を為すことで、コミュニティと融和・協調していかなければならない、そのようなZ施設のありようが、浮かび上がってくる。

付け加えるならば、図1および図2を使って行った考察は、多大に流動性を含んだものである。その時々の時間、個人がおかれた状態や立場、人間関係の善し悪し、コミュニティ内の情勢によって、揺れ動き続けている。図1、図2における色の濃淡はそれぞれの要素を区切ってしまうことの困難性を表現している。その上で、あえてZ施設とコミュニティの人々との関わりの様相を、下のように提示してみることにする。(図3)

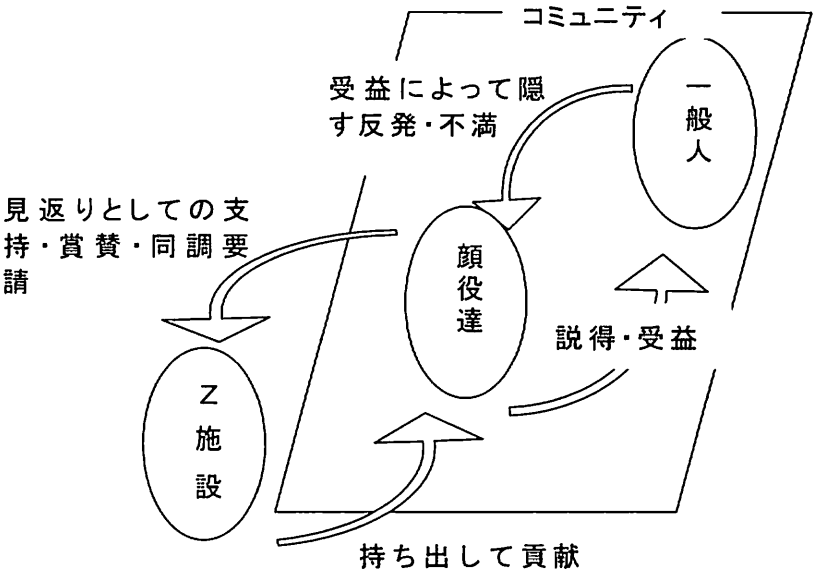

図3　Z施設とコミュニティとのかかわりの様相

入所者やOBは、コミュニティの顔役たちに無心したり、退所者による飲酒騒ぎを起こしたりというように、コミュニティに対する逸脱行為・批判を受ける行為のあることは事実である。しかし同時に、Z施設が、喫茶事業、高齢者配食サービス、古家解体作業等の、持ちだしのコミュニティへの貢献活動を意識的に続けているというのも、既述の通りである。

コミュニティからZ施設への反応はどういったものであろうか。

コミュニティの人々は、さまざまなかたちでZ施設から貢献活動を受けながら、逸脱・批判的な行為を行う入所者・OBに献身する職員へは賞賛の意を表し、無名化した存在として扱われる入所者達に対しては、コミュニティが持つ規範への同調を求める。そして、程度やあらわれ方はさまざまであるものの、逸脱する入所者・OBに対して持っている反発を、コミュニティが得るZ施設からの受益によって抑えている、といった関係が成り立っていると考えられる。Z施設職員にとって、コミュニティからの賞賛に賛同することは、コミュニティが入所者に対して求める規範への同調要請に応じることとなる。Z施設がこれからも当コミュニティという集団にとどまろうとする限りにおいて、少なくともZ施設の職員は、その要請にある程度応えなければならない。

規範とは判断・評価・行為などの拠るべき基準のことである。コミュニティにおける規範とは多くの場合、他の土地からやって来て新しく住み着いた者にでもわかるように明確にされているわけでも、明文化されているわけでもないだろう。ゴミ出しやペット飼育のルールを守る、町会費を納める、役所で転居・転入届け

を提出する、公共料金の引き落とし口座を開設する等、自分の意志において、ある場所で生活しようとする者であるならば、大きな困難を伴わずに理解し行動する際に拠るべき、上記のような判断基準と、コミュニティでの規範との間には、大きな違いがある。そういったコミュニティ規範の決定がコミュニティ構成員の恣意に委ねられている以上、常にＺ施設の側が、動物的ともいうべき触覚を働かせ、コミュニティにおける規範を察知する責任を負わされ続ける。

集団から押しのけられた他者は、自発的であるか他律的であるかはともかく、その受け入れの程度において、序列化され集団の周辺にとどまる。集団から完全に外に出て反逆を試みたりすることはきわめて少なく、多くは集団の境界線内側にあってその規範を内面化しながら、その受容の程度や解釈の仕方が異なるだけである。

排除されながらも中庸をとるというバランス感覚が、周辺にとどまった者達（Ｚ施設の全体とはいえないだろうが少数ではないだろう）には要求される。そのような者達が排除を受け入れることで共同体に包摂してもらえるという、そんな一面が包摂と排除にはある。同質化と異質化を同時に引き受けることによって、初めて集団の構成員になる資格を得る構造といいかえてもよい。しかし、Ｚ施設にとって、コミュニティという共同体の構成員としての地位は二級市民的なものである。なぜならば、コミュニティの規範を決定する際にＺ施設の関わりは必要とされないからである。高齢者配食サービスにおいて、活動する入所者と利用者との間に民生委員が立ち会うということは、そのことを示している。

顕在化していないコンフリクトは、コミュニティ対Ｚ施設というような二項対立的にあるのではなく、コミュニティの中心人物・コミュニティの一般の人々・Ｚ施設の様々な入所者・職員等を巻き込んだかたちで存在していると考えられる。

コンフリクトの構造がかつて顕在的に存在していたという事実があり（Ｚ施設は当初独立して運営できず、既存の宿泊提供施設[37]の一部を借りて運営されていた）コミュニティに対し何らかの対応（コミュニティへの貢献活動）を行うことによって、コミュニティからの排除を免れてきた。様々な働きかけの結果、純然たる他集団ではないものとしてコミュニティへ包摂され、ようやくコミュニティとの緊張関係が潜在化しているという状況、これがＺ施設を取り巻く状況である。緊張状態へという動きがいつ起こるかもしれないという現状が常に、Ｚ施設からすれば存在するのである。このことは国際的医療団が陥っている状況に対する、前施設長Ｗｓの危惧を考えると理解が可能である。

Ｚ施設とコミュニティとの間にコンフリクトがあるのではと、筆者が察知するきっかけとなった前施設長Ｗｓの発言「こっちのやることで評価を出して地域に認めさせていかなければならない」「せめぎ合いの連続」とは、したがって、以下のように理解できるであろう。それは、Ｚ施設を取り巻く複雑な現実をくぐり抜けてきた結果、コミュニティから排除されることは危惧しつつ、全面的に包摂されるためには様々なコミュニティからの要求を呑み込まざるを得ない事情を十分承知している、前施設長をはじめとするＺ施設に集う者達の実感を表す言葉だったのである。

おわりに

退所した後、自室での飲み会を行いコミュニティからひんしゅくをかうような、群れることを志向するＯＢもいれば、孤独にいることを引き受けるＯＢも存在する。

地域の空き地の有効活用としての農園園芸をしている施設ＯＢのＨｎさんは、ある日こんなことを言った。

「交差点の向こうで、知った人と会う。むこうもこっちのこと気づいていて立ち止まっている。その時にお茶でも行こうかと、その一言が言えない。お金もなかった。あとでなんぼ思ってももう会えん。その一言が、そのきっかけが作れん。それができない性格、そんなことの繰り返しやった。そんな人生やった。それが出来てたら、ここにはおらん。他の生き方、他の仕事が、出来てた思う。そんな繰り返しやった」「もう

いっかい、生きてきた時間を取り戻すことはできんかな」[38]

Ｈｎさんの発言には、幾通りもの解釈が可能であろう。勿論、この言葉に後悔を飲み下しつつも生きてゆかねばならないＨｎさんの長嘆息を感じることは事実である。しかし、彼の発言に見られるような否定性の感覚は、今ある状況を乗り越え変革してゆく時に不可欠の要素であると考えることもできるのではないか。前施設長の語った関係性支援とは、躓いた履歴を持った人々が新しく生き直すための支援の謂であると共に、コミュニティにおいてこそより意識的に展開されなければならない働きかけであろう。そうすることによってはじめて、Ｚ施設とコミュニティとの関係変容、リフレーミングへの可能性につながるのである。施設とコミュニティとの葛藤を経験することは施設にとってはもちろんのこと、コミュニティにとっても多くのエネルギーを強いられるものである。しかし我々が忘れてはならないことは、共生は自他の合一ではなく、分離をこそ前提としているという点である。本稿で述べたように、包摂と排除の境界は明白なものではない。容易に融和しがたい他者、脅威であるやもしれぬ他者との緊張を引き受けた上での営みが、多方向から続けられなければならない。

魯迅はその著書の中でこう書いた。

荘子は言うたことがある「乾いた轍の鮒は相互に唾沫をつけて湿気でぬらす」と。しかし、彼はまた言う。「むしろ江湖にいて相互に忘れた方がよい」と。

現在を生きる我々は、互いを忘れさることはできない。コミュニティとＺ施設もまたしかりである。それ故にこそ、我々は智慧を持つ努力を怠ってはならないのである。矛盾が矛盾として意識され、葛藤を葛藤として共有することに、勇気を持たなければならない。葛藤が発生することがまったくの悪しきことなのではなく、それを契機にコミュニティの在り方や人々の意識の枠組みがどうリフレーミングされるのかが問われているのである。

人と人との相互関係の在り方を問い直しつくりかえていくことは、さまざまな利害を持って生きている人々の間に往々にしてせめぎ合いの諸相を生じさせることだろう。しかしながら、せめぎ合いは、せめぎ合いがなければ出会うことのない他者と出会う契機であるがゆえに、貴重なものとなる可能性を有しているのである。現実に存在するせめぎ合いを意識し、それらとの格闘からしか、リフレーミングの可能性は生じないであろう。「それでも、なお」というかすかな望みや揺らぎを率直に感受しつつ、共生の可能性を模索し、互いの間にある溝に橋を架ける営為の構築に絶望してしまわないことが我々に求められている。

【注】

1）Ｚ施設の法的根拠は生活保護法第38条「更生施設は、身体上又は精神上の理由により養護及び生活指導をする要保護者を入所させて生活扶助を行うことを目的とする施設とする」である。敷地面積1401.65m²、鉄筋コンクリート造り３階建て、延べ床面積2150平方メートル。施設長１名、主任１名、指導員４名、事務員２名、看護師、栄養士、調理員、委託医等、13名の職員構成となっている。

2）コミュニティという用語は地域社会と並んで日常的にも学問的にもよく使われる言葉である。社会学者ヒラリーがコミュニティの94の定義を整理してその共通する特徴を地域性と共同性にあるとしたというのは定説となっている。日本でもコミュニティという言葉がそのまま表記され用いられるようになってきており、地域社会とか身近な生活の場として理解され、自生的で自然発生的なものと考えられることが多い。しかしそれらの多くが都市化産業化の中で弱体化し解体の方向へ向かっているのが現実の姿であろう。本稿ではコミュニティに共同体の意味を代表させてこの言葉を使うことにする。

3）古川ら［1993］によると、一般的に福祉施設とコミュニティとのコンフリクトとは、「社会福祉施設の新設にあたり、その存在が地域社会の強力な反対運動に遭遇して頓挫したり、あるいは、存在の同意と引き換えに大きな譲歩を余儀なくされたりする、施設と地域との間での紛争事態」と定義されている。本稿では、コンフリクトという言葉によって表される事態がこの定義よりも、価値・思想・意見・利害等にわたる多面的な対立であるということ、さらにその底にある欲求や心理規制等人間の内面にあるもののぶつかり合いをも意味しているものとして使っている。

4）この国際的医療団は1971年、フランスで設立された営利を目的としない国際的な民間人道医療援助団体で、国際ＮＧＯとして世界18カ国に支部がある。日本におけるホームレス問題が単に失業問題としてではなく制度からの排除、社会からの排除を示す重層的な問題群を抱える複雑な社会問題であるという認識から、日本国内での診療所開設を模索している。

5）迷惑施設とは現象的には空間的秩序へ混乱をもたらし、地域住民の生活論理から発する迷惑意識によって引き起こされる施設である。施設自体に対する住民の心理的抵抗感に基づく施設アレルギーや理解不能なものに対する不安、受け入れがたい価値観等によって生じると考えられる。

6）2005年11月17日　前施設長Ws（発言日と発言者 以下同様の記述方法をとる）。

7）2006年２月２日　入所者Cn。

8）平成17年度『Ｋ区各種団体名簿』。

9）2006年度４月現在の被生活保護世帯数はＺ施設がある区全体で1280世帯であるのに対して、当地区で182世帯、西に隣接する地区（Ｚ施設のＯＢたちが多く居住している）で231世帯である。又、同年同月の被保護人員は区全体で1682人、当地区で263人、西に隣接する地区で298人である。

10）2006年８月７日　近隣女性Qc。

11）2006年８月７日　近隣女性Qc。

12）大阪市立大学都市環境問題研究会［2001］が行った、野宿生活者（ホームレス）に関する総合的調査研究報告書によると、「市民」は野宿生活者を「邪魔者」「弱者」「気楽」「怠け者」「恐怖」「不器用」といった柱で構成される枠組みの中に位置づけ把握しているという。そして、野宿生活者として生きる具体的な個人が「市民」によって把握される際に放り込まれるのは、この６つの柱から構成されるイメージ空間内部のいずれか「適切」とされる位置であるとしている。

13）2005年７月28日　施設OBAn。

14）2005年５月19日　施設職員Ys。

15）2005年12月10日　前施設長Ws。

16）2006年１月５日　入所者Hn。

17）退所後に再び路上生活に戻らないためのサポートネットワークの必要性は医療改革運動としての脱施設化という文脈でもよく語られる。巨大精神科病院の解体と社会的ネットワークの建設とが同時に行われなければ医療改革運動としては失敗であるという批判であり、この批判を簡略にまとめた文言としては「慢性病棟から出して路上へ捨てた」という言い方になる。英語では「backward to back street」なる悪口である。また関係性という語句について社会学者ゴッフマンは「スティグマという言葉は人の信頼をひどく傷つけるような属性を言い表すために用いられるが、本当に必要なのは明らかに、属性ではなく関係性を表す言葉なのだ」と述べている。

18）2005年10月15日　施設前主任Xs。

19）2006年８月７日　近隣女性Qc。

20）2005年12月８日　入所者Bn。

21）2005年10月13日　入所者Cn。

22）2005年10月13日　入所者Cn。

23）2006年２月23日　小学校関係者。

24）2005年10月27日　近隣女性Qc。

25）規範との関連による部落差別の分類を試みた野口道彦［2001］は、差別をしてはいけないというフォーマルな社会規範においては同調し、部落を忌避せよという集団規範においても同調する傾向を、八方美人型として分類した。

26）社会的距離とはアメリカの社会学者バージェスが操作化した概念であり他集団に対する社会関係の上で感じる同情的な理解（親近性）の程度を意味する。具体的にはある集団の成員を受け入れることができるかを「結婚によって親戚になれる」「隣人として町に入れる」等の程度差によって計るものである。

27）総合学習についての冊子　平成12、13、14、15年度版　Ｚ施設のある地域を校区に持つ公立Ｔ小学校。

28）2006年３月23日　近隣女性Rc、Sc。

29）2006年３月16日　入所者Dn。

30）野宿生活者の医療相談活動を続けている黒川渡［2004］医師は、彼らの医療不信や医療受診に至る手続きで生じる不信感について根拠はあるのだと以下のように記す。「以前、倒れた時に救急車で運ばれて説明もなく点滴だけで寒い夜中に放り出された、馬鹿にした扱いを受けた、ベットがないからと体よく追い返されたなど、枚挙に暇がないほどの具体的事例が出てくる」また、2006年12月29日付け毎日新聞朝刊で萩尾信也記者が「貧困の世襲化」という記事の中で以下のように記述している。「クリスマスの夜。新宿駅の地下道で、60歳の路上生活者の男性が青ざめた顔でうめいていた。「救急車で病院に運ばれたが、点滴１本で帰された。３日間食べていない」。声から生気が消えていた」

31）2005年９月29日　入所者Fn。

32）2006年８月７日　近隣女性Qc。

33）2006年２月２日　縫製ボランティアTc。

34）2006年２月27日　縫製ボランティアTc。

35）図中の例の提示には、プログラム、発言、心理、固有名詞、状況等が混在しており、一つのカテゴリーでまとめることができなかった。図２についても同様。

36）国際的医療団診療所は保健所からの開設許可が地元住民の反対のためおりず、現在は事務所のみを構えているという。事務所は同団体の活動に理解の深い支援者の尽力で見つけたと、事務所スタッフで国際的医療団看護師でもある女性は語ってくれた（2006年10月29日）。同時に又「（国際的医療団と）事務所を見つけてくれた支援者が属する団体とが、関わりがあると地元民に思われたら迷惑がかかるので、ここんとこずっと距離をおいている」こと、「（国際的医療団が）診療所を構えたら野宿者がわんさかやって来るやないか。お前ら、我々やこの地区を馬鹿にしているのか」という声が地元民からわき起こり、怪文書らしきものが出回った、とも彼女は語った。前施設長Ｗｓの発言については、本稿にある通りである。

37）宿泊提供施設とは生活保護法第38条に規定されており、住宅扶助を行う。入所施設である更生施設とは異なり、利用施設である。

38）2005年12月22日　施設OBHn。

【参考文献】

青木秀男［1989］『寄せ場労働者の生と死』明石書店。

青木秀男［2001］『場所をあけろ』松籟社。

秋山智久［1978］「『施設の社会化』とは何か―その概念・歴史・発展段階―」『社会福祉研究』第23号。

荒井献［1993］『イエスとその時代』岩波新書。

岩田正美［2000］『ホームレス／現代社会／福祉国家－「生きていく場所」をめぐって』明石書店。

大阪市立大学都市環境問題研究所［2001］『野宿生活者（ホームレス）に関する創造的調査研究報告書』。

大島巌［1992］『新しいコミュニティづくりと精神障害者施設－「施設摩擦」への挑戦』星和書房。

黒川渡［2004］「あおぞら医療健康相談から見えてくるもの」『大阪保険医雑誌』No.451　大阪府保険医協会。

社会福祉法人大阪市民援護事業団［1988］『大阪市民援護事業事業団30年史』。

高橋哲哉［2000］『戦後責任論』講談社。

田村正勝編著［2003］『甦るコミュニティ』文眞堂。

西沢晃彦［1975］『隠蔽された外部―都市会屑のエスノグラフィー』彩流社。

野口道彦［2001］『部落問題のパラダイム転換』明石書房。

吉川孝順・庄司洋子・三本松政之［1993］『社会福祉施設－地域社会コンフリクト』誠信書房。

間庭充幸［1990］『日本的集団の社会学　包摂と排除の構造』河出書房新社。

見田宗介［1980］『現代社会の社会意識』弘文堂。

八木晃介［2000］『「排除」と「包摂」の社会学的研究』批評社。

H・アーレント［2004］『人間の条件』ちくま学芸文庫。
I・ウォラーステイン［1997］『史的システムとしての資本主義』岩波書店。
G・W・オルポート著［1968］『偏見の心理』培風館。
E・ゴッフマン［1973］『スティグマの社会学』せりか書房。
E・ゴッフマン［1980］『集まりの構造』誠信書房。
G・ジンメル［1994］『社会学―社会化の諸形式についての研究』白水社。
A・セン［1989］『合理的な愚か者』勁草書房。
A・セン［1999］『不平等の再検討』岩波書店。
A・セン［2002］『貧困の克服』集英社新書。
P・L・バーガー＆T・ルックマン［1977］『日常世界の構成』新曜社。
W・F・ホワイト［2003］『ストリート・コーナー・ソサイエティ』有斐閣。
A・メンミ［1975］『差別の構造　性　人種　身分　階級』合同出版。
E・リーボウ［2001］『タリーズコーナー』東信堂。
O・ルイス［2003］『貧困の文化』ちくま学芸文庫。
R・D・レイン［1979］『自己と他者』みすず書房。
魯迅［1981］「私は人をだましたい」『魯迅評論集』岩波文庫。